

向山宮岡遺跡
丸田遺跡
中屋遺跡の大量出土銭

2013年

岡山県赤磐市教育委員会



中屋遺跡出土の大量出土銭・備前焼三耳壺

序

本書は、岡山県赤磐市に所在する向山宮岡遺跡・丸田遺跡・中屋遺跡の大量出土銭の調査成果を取りまとめたものです。

これらの調査・発見は、平成18・22年度における各種開発事業に伴うもので、それぞれに本調査による記録保存・事業調整のための確認調査・工事中の不時発見と講じた措置は異なりますが、こうした開発と埋蔵文化財保護の適切な調整を図ることは、我々に課せられた大切な責務であります。これらの調査は比較的小規模なため、このたび調査の成果をまとめて、一冊の報告書として上梓することとしました。

調査により市内の弥生時代の集落の様相が明らかとなり、また中世における大量出土銭の実態に迫る貴重な資料を得ることができました。これらの成果を収めた本書が文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いに存じます。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたりましては、岡山県をはじめ関係各位ならびに土地所有者・事業者・地元の方々から多大な御支援と御協力を賜りました。記して厚くお礼を申し上げます。

平成25年2月

赤磐市教育委員会
教育長 土井原 敏郎

例　　言

- 1 本書は赤磐市教育委員会が平成18年度に実施した向山宮岡遺跡、ならびに平成22年度に実施した丸田遺跡・中屋遺跡の大量出土銭の調査報告書である。
- 2 各遺跡の所在地は、次のとおりである。

向山宮岡遺跡	:	岡山県赤磐市下仁保1442-1
丸田遺跡	:	津崎114ほか
中屋遺跡の大量出土銭	:	石212
- 3 各発掘調査の実施期間、担当者、面積は次のとおりである。

向山宮岡遺跡	:	平成18年9月20日～22日、宇垣匡雅・有賀祐史、74m ²
丸田遺跡	:	平成22年12月8日～平成23年1月6日、澤山孝之・有賀・畠地ひとみ、116m ²
中屋遺跡の大量出土銭	:	平成22年7月18日発見
- 4 本書の作成ための整理作業は、平成23・24年度に赤磐市教育委員会において行った。
- 5 本書の執筆は、第1～3章を有賀が、第4章を畠地が担当し、全体の編集は高田恭一郎指導のもと有賀が行った。
- 6 中屋遺跡の大量出土銭の調査においては、土地所有者ならびに発見者の青山邦芳氏、青山義子氏に多大なる御協力をいただいた。報告書の作成にあたっては、伊藤晃氏、重根弘和氏に助言を得た。記して感謝の意を表す次第である。
- 7 本書に関する出土遺物・実測図・写真等は赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337）に保管している。

凡　　例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第V系の座標北である。また、報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。各調査地の磁針方位は次のとおりである。

向山宮岡遺跡：西偏7°26'	丸田遺跡：西偏7°27'	中屋遺跡：西偏7°36'
----------------	--------------	--------------
- 2 本書掲載の遺構・遺物の縮尺率は各図に記しているが、基本的には次のとおり統一している。

竪穴住居：1/60	土坑：1/30	トレンチ：1/80	土器：1/4	石器：1/3	銅銭：1/1
-----------	---------	-----------	--------	--------	--------
- 3 遺物番号は、各遺跡ごとの通し番号である。また、土器・陶磁器については番号だけを付け、石器にはS、銅銭にはMを番号の前に付けている。
- 4 掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。
- 5 土層断面図の土色は、各調査担当者の記述に従っており、特に統一していない。
- 6 図2・3は赤磐市役所作成の1/25,000地形図を複製・加筆したものである。
- 7 時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 向山宮岡遺跡・丸田遺跡	1
第2節 中屋遺跡	3
第2章 向山宮岡遺跡	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の概要	7
第3節 まとめ	8
第3章 丸田遺跡	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査の概要	9
第3節 まとめ	15
第4章 中屋遺跡の大量出土銭	17
第1節 調査に至る経緯	17
第2節 調査の概要	17
第3節 まとめ	24
遺物観察表	29
図版	
報告書抄録	
奥付	

卷頭図版目次

中屋遺跡出土の大量出土銭・備前焼三耳壺

図 目 次

図1 遺跡位置図 (1/2,000,000)	1	図4 調査位置図 (1/3,000)	5
図2 周辺主要遺跡分布図1 (1/25,000)	2	図5 全体図 (1/100)	6
図3 周辺主要遺跡分布図2 (1/25,000)	4	図6 堪穴住居 (1/60)・出土遺物 (1/4)	7

図7 土坑 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3).....	8	図19 T11 (1/80)	14
図8 トレンチ配置図 (1/5,000)	10	図20 T12 (1/80)・出土遺物 (1/4)	14
図9 T1 (1/80)	11	図21 遺跡推定範囲図 (1/5,000)	16
図10 T2 (1/80)・出土遺物 (1/4)	11	図22 出土地位置図 (1/2,000)	18
図11 T3 (1/80)・出土遺物 (1/4)	12	図23 備前焼 (1/4)	19
図12 T4 (1/80)・出土遺物 (1/4)	12	図24 大量出土銭① (1/1)	21
図13 T5 (1/80)	13	図25 大量出土銭② (1/1)	22
図14 T6 (1/80)	13	図26 大量出土銭③ (1/1)	23
図15 T7 (1/80)	13	図27 岡山県における出土渡来銭の 鋳造国別出現率	26
図16 T8 (1/80)・出土遺物 (1/4)	13	図28 岡山県における出土渡来銭の出現率	27
図17 T9 (1/80)	14		
図18 T10 (1/80)	14		

表 目 次

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧	6	表4 大量出土銭種類一覧	20
表2 文化財保護法に基づく提出書類一覧	9	表5 岡山県における大量出土銭一覧	24
表3 文化財保護法に基づく提出書類一覧	17	表6 岡山県における大量出土銭種類一覧	25

図版目次

表紙図版 向山宮岡遺跡 調査区全景 (東から)		図版6 1 T12 P2 (北西から)	
図版1 1 土坑 (北から)		2 T12 土層断面 (西から)	
2 土坑 土層断面 (北東から)		3 調査風景 T3 (東から)	
3 出土遺物		図版7 出土遺物	
図版2 1 調査前 (南から)		図版8 1 出土地周辺 (東から)	
2 T2 (東から)		2 出土地 (東から)	
3 T2 土坑1 (北東から)		3 出土地 (南から)	
図版3 1 T2 土坑2 (南東から)		図版9 1 出土地南の畑にある五輪塔 (南から)	
2 T5 (東から)		2 報道発表の状況	
3 T6 (東から)		3 大量出土銭 三耳壺内の状況	
図版4 1 T8 (東から)		図版10 1 備前焼三耳壺	
2 T10 (北から)		2 備前焼三耳壺窯印	
3 T11 (南西から)		3 銅銭	
図版5 1 T12 (北西から)		図版11 大量出土銭	
2 T12 土坑3 (北から)		図版12 大量出土銭	
3 T12 P1 (北東から)		図版13 大量出土銭	

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 向山宮岡遺跡・丸田遺跡

向山宮岡遺跡と丸田遺跡は赤磐市南西部に所在する。岡山県南東部に位置する赤磐市は、県南部からの沖積平野と北部の吉備高原からの丘陵地からなり、南北に細長い市域をもつ。市域東端には岡山県の三大河川の一つである吉井川が南流し、西部では中規模河川の砂川が貫流している。これらの河川や支流に沿っていくつもの盆地状の平野が形成されており、この平野を中心に宅地が展開している。

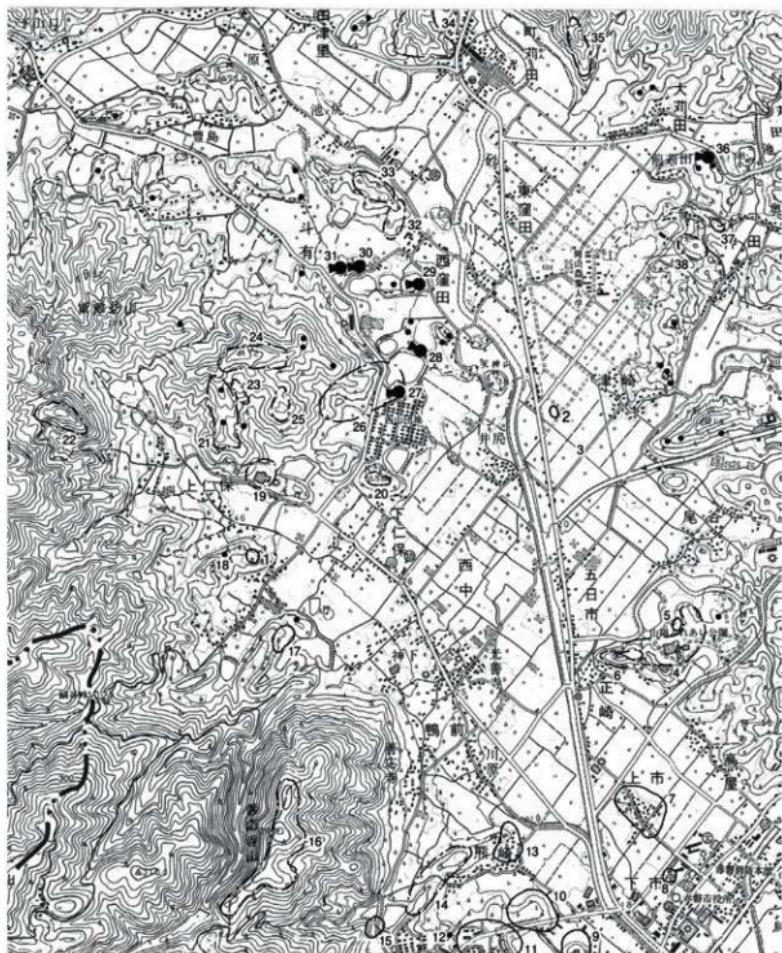
両遺跡は、砂川中流域の大字町苅田から立川にかけて広がる平野部に位置し、直線距離で約1.7km離れている。向山宮岡遺跡は、砂川右岸の平野に東西した標高約70mの低丘陵先端に立地し、一方で丸田遺跡は砂川左岸の標高約20mの平野部に所在する。対照的な環境に形成された遺跡である。

次に、周辺の歴史的環境についてみていく。この地域では、旧石器時代の明確な遺跡は確認されていない。上仁保の吉原遺跡から縄文時代晚期に属する石棒が出土している。弥生時代前期の土器は、上市の山陽小学校遺跡で出土しているが、遺跡数は少ない。この地域で遺跡数が著しく増加するのは、弥生時代中期後半以降である。この時期の遺跡は、丘陵の尾根や斜面等に立地していることが多い。中でも東高月丘陵に営まれた用木山遺跡、惣岡遺跡、門前池西方遺跡、門前池東方遺跡などの遺跡群は、この地域の拠点的な集落と考えられる。向山宮岡遺跡の対岸にある正崎の浦山遺跡では、標高約30~40mの丘陵斜面で土器包含層と土器溜まりが検出されており、平野部に面した低丘陵上の同様な遺跡のあり方として注目される。同じく、標高60m前後の丘陵南東斜面に所在する下仁保の南郷遺跡からは、弥生時代後期前葉の土器が出土している。一方で、平野部では散布地が知られるものの、丸田遺跡のように発掘調査などでその内容が分かっている例は少ない。

市内では約20基の前方後円墳が確認されているが、そのうちまとまった分布がみられる地域として、砂川中流域平野北部に位置する西窪田・斗有・下仁保周辺を挙げることができる。吉原6号墳は、柄鏡状の形態を呈す前期の前方後円墳で、獸帶鏡や方格規矩鏡などが副葬されていた。時期は下って、後期に二塚1号墳(37m)、同2号墳(23m)や沼田内古墳(26m)が築かれ、大形の横穴式石室を有する鳥取上高塚古墳(67m)が築造される。平野南西部に築かれた両宮山古墳(206m)の周辺に中期後半から後期前半の前方後円墳が集中して築造されたが、その終焉とともに、鳥取上高塚古墳に至るこれらの首長墓系譜が認められるのである。この後段階の前方後円墳築造を契機として砂川中流域平野から東側の丘陵地を隔てた可真川流域にある土井遺跡の埴輪窯が築かれたことが判明している。土井遺跡が所在する可真地域は小丸山古墳や弥上古墳といった後期の前方後円墳が複数認められる地



図1 遺跡位置図(1/2,000,000)



- 1 向山宮岡遺跡 2 丸田遺跡 3 西山高陽条里 4 正崎古墳群 5 浦山遺跡 6 正崎城跡 7 上市遺跡
- 8 山陽小学校遺跡 9 門前池東方遺跡 10 向遺跡 11 門前池西方遺跡 12 便木山8号墳 13 熊崎遺跡
- 14 熊崎古墳群 15 三つ池遺跡 16 善応寺城跡 17 南郷遺跡 18 向山古墳 19 大坂古墳群 20 高山城跡
- 21 上仁保城跡 22 葛木城跡 23 ほんこう古墳群 24 陣屋古墳群 25 宮池山古墳群 26 吉原遺跡・古墳群
- 27 吉原6号墳 28 烏取上高塚古墳 29 沼田内古墳 30 二塚1号墳 31 二塚2号墳 32 紙園古墳群
- 33 石相古墳群 34 可真木古墳群 35 向山古墳群 36 慶貞1号墳 37 赤坂古墳群 38 神田城跡

図2 周辺主要遺跡分布図1 (1/25,000)

域でもある。陶棺片が鳥取上高塚古墳で採集されているが、吉原古墳群には陶棺を納めた古墳があり、1号墳は須恵家形陶棺を、3号墳は土師質亀甲形陶棺を伴っている。また、中期後半に属す正崎2号墳は小規模な円墳であるが、武具や馬具など豊富な副葬品をもつ古墳として特筆される。古墳時代の集落は、門前池遺跡、門前池東方遺跡などで検出されている。

この地域の平野部には現在でも整然とした条里地割が残る。丸田遺跡の所在する津崎には、三反地・五反田・堀坪などの条里に関係する小字が認められ、東窪田には「縄目石」と呼ばれる条里地割の基準として置かれた石もある。ただ、これら西山高陽条里遺構の地割がいつ施行されたものかは判然としていない。古代においてこの地域は赤坂郡鳥取郷にあたり、平安時代末に在地領主である葛木氏により鳥取荘として開発され、長講堂領の莊園となった。戦国時代には、遠藤氏が鳥取荘を本領としており、浦上政宗に仕えた後、宇喜多直家、そして岡山藩主池田忠雄に仕えた。戦国時代の備前国の支配権争いにおいて、鳥取荘のあるこの地域は備前中南部における重要な地域であった。中世山城としては、葛木城跡、善応寺城跡、正崎城跡などが知られている。

引用・参考文献

- 岸田裕之1995「浦上政宗支配下の備前国衆と鳥取荘の遠藤氏」『岡山県地域の戦国時代史研究』広島大学文学部紀要55-2
- 神原英朗1971～1977『岡山県・吉原古墳群の発掘調査報告』1・2・4 山陽町教育委員会
- 西川宏1957『岡山県山陽町上仁保出土の石棒類』『私たちの考古学』4-3 考古学研究会
- 西川宏・則武忠直1958『備前山陽町吉原古墳群の陶棺』『古代吉備』1 古代吉備研究会
- 則武忠直ほか1986『山陽町史』山陽町
- 則武忠直ほか2004『正崎2号墳』山陽町文化財調査報告1 山陽町教育委員会
- 山廢康平ほか2005『土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191 岡山県教育委員会

第2節 中屋遺跡

中屋遺跡は、赤磐市北部に位置する。この地域は吉備高原から続く標高300～400mの山間地で、備前と美作の国境に近い。吉井川の支流高田川とその支流北軒川によって形成された河谷からなり、江戸時代には北軒川に沿った谷筋は岡山から美作倉敷へ通じる街道「倉敷往来」となっていた。また、吉井川では高瀬舟を利用した水運がみられ、交通上の要衝といえる。遺跡は、高田川右岸の標高約330mの宇根山から南に続く山地に形成されたもので、標高約275mの高所に位置する。

吉井川右岸でかつ高田川右岸にあたる地域は、延暦七年(788)に和氣郡から分立され磐黎郡佐伯郷に属していた。高田川が郡境となって左岸は赤坂郡であった。

この地域で知られる最古の遺跡は、高田川と北軒川の合流地点に程近い立道遺跡で、縄文時代後期の深鉢が1点出土している。立道遺跡と一連の斜面地に位置する来光寺遺跡では、北西向きの斜面地に弥生時代中期後葉に属する堅穴住居や段状造構などが検出されている。

北軒川に沿った谷筋には、古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳2基が認められる。このうち平岩古墳は発掘調査がなされ、残存長9.1mの無袖式と思われる横穴式石室を有し、鏡象嵌が施された刀装具が出土している。もう1基の二軒屋1号墳も残存長5.2mの無袖式の横穴式石室をもつ。前述の立道遺跡からは古代の鍛冶関連遺構が検出されている。

中世に至って、来光寺が建立され2基の基壇建物が確認されている。来光寺遺跡や立道遺跡で中近

世の遺構が認められるほか、この地域には山城や石造物が点在する。北軒川右岸に張り出す丘陵頂部には飯山城跡が想定され、高田川左岸の丘陵上には塩木城跡や徳近城跡が確認されている。中屋遺跡が所在する一帯には、五輪塔や古墓などが複数認められ、中近世を通して集落が営まれていたものと推定される。

引用・参考文献

尾上元規ほか2006「来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』199 岡山県教育委員会
吉井町史編纂委員会1995『吉井町史』通史編 吉井町



1 中屋遺跡 2 石の宝鏡印塔 3 篠底の五輪塔 4 飯山城跡 5 二軒屋1号墳 6 平岩古墳
7 来光寺跡・来光寺遺跡 8 立道遺跡 9 塩木城跡 10 徳近城跡 11 塚畠古墳 12 ながた遺跡

図3 周辺主要遺跡分布図2 (1/25,000)

第2章 向山宮岡遺跡

第1節 調査に至る経緯

㈱N T T ドコモ中国が赤磐市下仁保字田潤1442-1において携帯電話基地局を新設する計画があり、平成18年7月5日付けで文化財保護法第93条の規定に基づく届出の提出を受けた。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である名称未定（山陽町No.35）の散布地となっており、東にのびる低丘陵上に位置するため、遺構の所在する可能性が想定された。事業者、岡山県教育委員会と協議の結果、工事の際に赤磐市教育委員会の担当職員が立会い、遺構等が検出された場合は事業者の協力と負担のもとで記録保存を図ることになった。

平成18年9月7日にアンテナ基礎掘削の際に工事立会を実施し、弥生時代の住居の一部とみられる遺構を検出した。それに続く付帯工事の掘削が遺構の検出面より深く及ぶことが判明したため、やむ



図4 調査位置図 (1/3,000)

を得ず事業予定地全域の本発掘調査を行うことになった。平成18年9月21日付け赤教社第663号で文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を岡山県教育委員会に提出し、平成18年9月20日から22日まで現地調査を実施した。

なお、遺跡名は届出等の段階から丘陵を構成する小字名の向山、宮岡から向山宮岡遺跡と呼んでおり、これを踏襲している。

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

�冈山県文書 番号・日付	種類及び名称	所在地	面積（m ² ）	目的	届出者	期間	処理の内容・理由
教文理 第464号 H18.7.19	散布地 向山・宮岡散布地	赤磐市下仁保字田園1442-1 の一部	30	通信設備関係	事業者	H18.9.1～ H18.11.30	工事立会

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積（m ² ）	原因	報告者	担当者	期間
赤教社 第663号 H18.9.21	集落跡 向山宮岡遺跡	赤磐市下仁保字田園1442-1	74	通信設備関係	赤磐市教育委員会 教育長 花田文甫	宇垣匡雅	H18.9.20～ H18.9.22

遺物発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

岡山県文書 番号・日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	保管場所
教文理 第737号 H18.10.10	弦生土器 計整理箱1箱	赤磐市下仁保字田園1442-1 向山宮岡遺跡	H18.9.22	赤磐市教育委員会 教育長 花田文甫	個人	赤磐市山陽郷土資料館

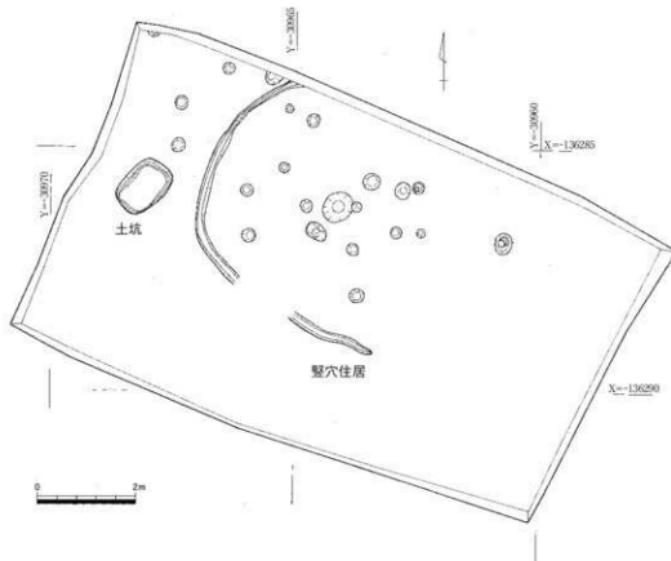


図5 全体図（1/100）

第2節 調査の概要

(1) 概要

調査地は、平野部に張り出した東にのびる尾根先端頂部に位置する。標高は約67.7mで、山裾との比高差は約25mを測る。同じ尾根には自性院という真言宗の寺院や、貞和五年（1349）の銘を残す石造地蔵菩薩坐像が所在する。調査区は長方形で、面積は74m²である。調査前には煙地として利用されており、表土を含め約25cmを除去すると、暗黄色の花崗岩バイラン土の地山に達する。地山は、尾根の傾斜で西から東に向かってやや下降し、その地山上面で遺構が検出された。

検出した遺構は、弥生時代後期に属する竪穴住居1棟と土坑1基であるが、両者には時期差が認められる。また、調査区内には柱穴も多数確認されている。

(2) 遺構と遺物

竪穴住居（図6）

調査区の中央北寄りで検出された、壁体溝が胴張隅丸方形にめぐる竪穴住居である。北側は調査区外となり、東側は地山が下がっているため消失し残っていないかった。規模は約5mと推定される。主柱穴は4本で、検出面からの深さは42~63cmである。中央穴は平面椭円形を呈し長軸で65cmを測る。中央穴の埋土から器台1と高杯2が出土した。高杯2は器表の剥

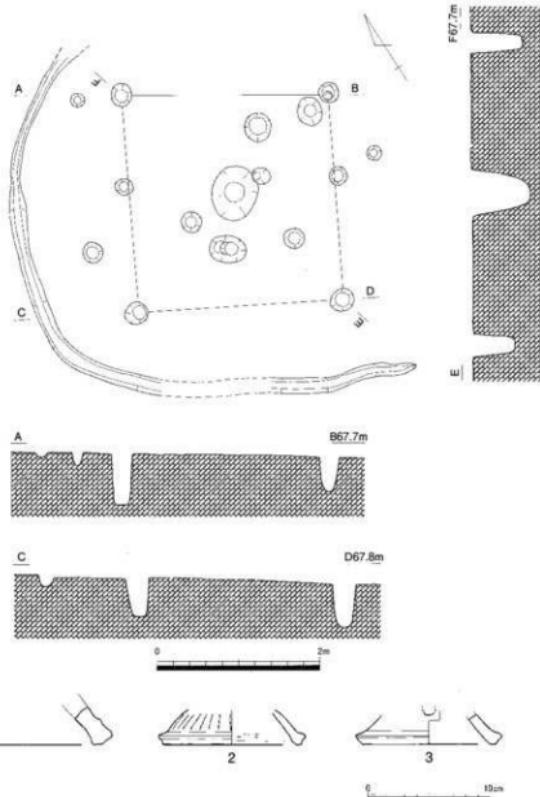


図6 竪穴住居（1/60）・出土遺物（1/4）

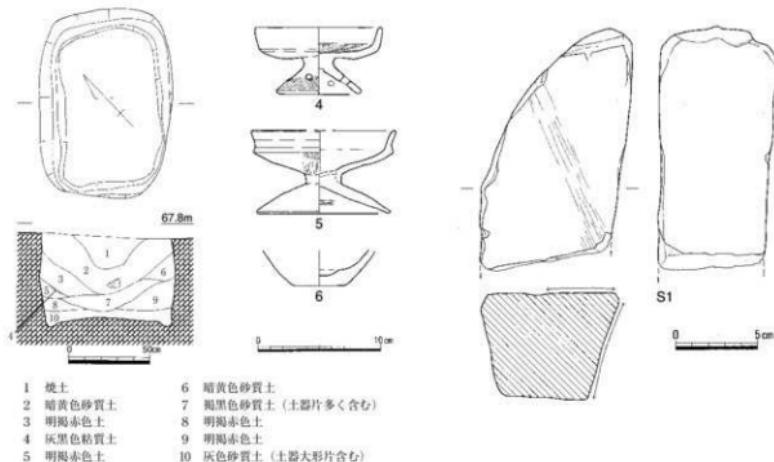


図7 土坑(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)

落が激しいが、脚部表面に櫛掃沈線がみられる。また、南に位置する主柱穴から、高杯③の脚部部片が出土した。これらの出土遺物から、住居の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

土坑(図7、図版1)

調査区の西、堅穴住居に近接して位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸118cm、短軸82cmを測る。検出面からの深さは58cmである。埋土上層に赤く被熱した焼土が堆積しており、それを除去すると一部で被熱した硬化面が認められた。また、最下層には比較的大形の土器片が含まれていた。底面の壁際には深さ約8cmの溝がめぐっており、壁面は垂直に近い形をなしている。埋土下層から、高杯④・⑤と壺あるいは甕の底部片⑥が出土した。高杯⑤は杯部と脚部が別づくりである。砥石S1も出土している。出土した土器から、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

第3節まとめ

今回の調査により、向山宮岡遺跡が弥生時代後期の集落であることが確認できた。その立地は比較的低い尾根頂部の平坦に近い場所である。調査面積が狭いため、集落の全体像は想像し難いが、尾根頂部とその周囲の緩斜面を中心で営まれていたものと考えられる。堅穴住居と土坑は約70cmしか離れておらず、住居の覆屋の広がりを考慮すると、同時併存は想定し難く、それぞれに出土した土器からも遺構に時期差を見出せる。そのため、弥生時代後期前葉と後葉の二時期に集落が形成されたようである。後期前葉には住居が、後葉には土坑が設けられた。土坑の機能は不明であるが、食料の貯蔵施設のようなものだったかもしれない。

第3章 丸田遺跡

第1節 調査に至る経緯

赤磐市長より平成22年9月8日付け赤消総第281号で同市津崎字丸田114ほかにおける新消防庁舎建設、ならびに同日付け赤環第123号で同市津崎字コイ210ほかにおけるごみ処理施設建設の事業計画予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を受けた。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である西山高陽条里に含まれるため、事前に確認調査を行い、この調査によって遺跡が確認された場合には本発掘調査あるいは工事の設計変更等を含めた協議を行う旨の回答を行った。

市事業担当課と協議が整い、平成22年12月8日から平成23年1月6日まで確認調査を実施した。調査の結果、条里遺構の下層でT2およびT12から弥生時代の遺構が検出された。未周知のこの弥生時代の遺跡については小字から丸田遺跡という名称をつけた。条里遺構に関しては、現在でも踏襲されている1町四方の連続する方形区画が示すとおりであるが、現代耕作土下で旧水田層と考えられる土層は認められたものの、それ以前の条里に関わる遺構・遺物は確認できなかった。

この確認調査結果を受け、工事設計について丸田遺跡の範囲から建築物を除外し、擁壁工などは面積が狭小で掘削深度が遺構面に及ばないため、本発掘調査ではなく工事立会で対応することとなった。

表2 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財確認調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	周知 周知外	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積(m ²)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
赤教社 第807号 H23.2.1	周知	集落跡 西山高陽条里	赤磐市津崎114ほか	116	その他建物（新 消防庁舎・ごみ 処理施設）	有	赤磐市教育委員会 教育長・土井原敏郎	澤山孝之 有賀祐史 畠地ひとみ	H22.12.8～ H23.1.6

遺物発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

岡山県文書 番号・日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	保管場所
教文理 第116号 H23.1.24	弥生土器・須恵器ほか 計整理箱2箱	赤磐市津崎114ほか 西山高陽条里	H22.12.8～ H23.1.6	赤磐市教育委員会 教育長・土井原敏郎	岡山県農林水産総合 センターほか	赤磐市山陽郷土資料館

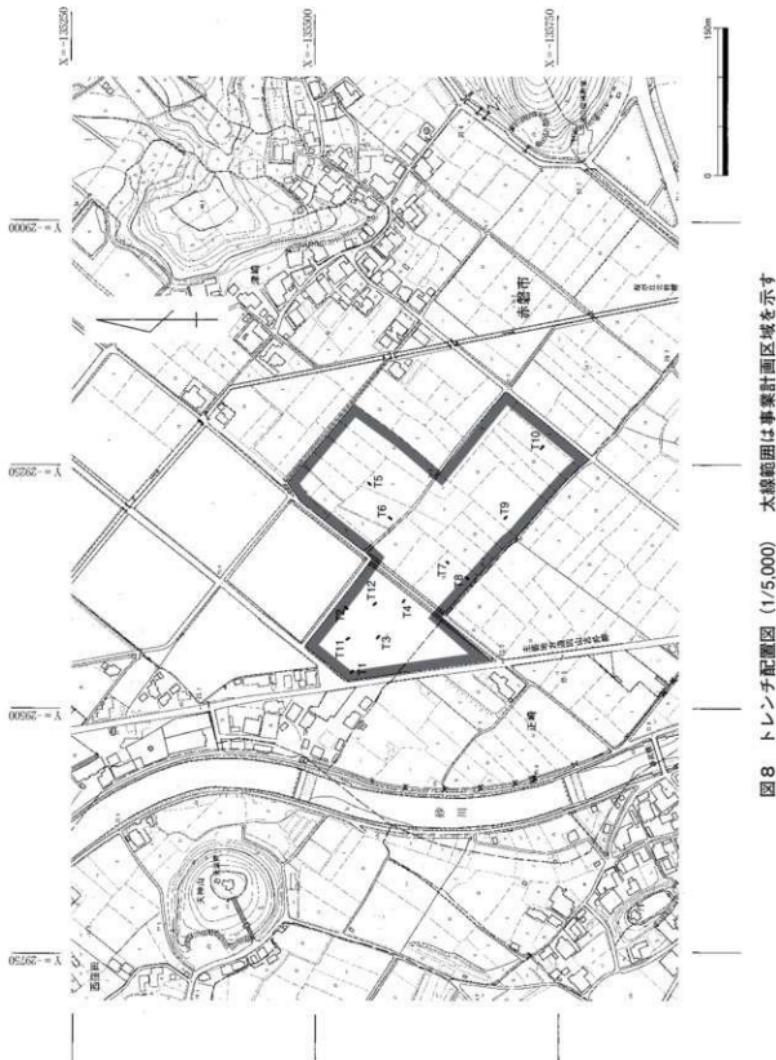
第2節 調査の概要

（1）概要

調査地は、砂川左岸の標高約21.5mの平野部に位置し、調査地を含めた周辺には1町四方の条里地割と考えられる整然とした区画の水田が広く認められる。当初は条里遺構の確認を目的に、トレチを事業計画区域内に10ヶ所設定したが、弥生時代の遺構を検出したことから北西部に2ヶ所追加し、合計12ヶ所を調査した。各トレチは条里地割に沿って設け、規模は原則2×5mで、調査面積は合計116m²である。

条里遺構間連では、T5・8・10等で現代耕作土下に旧水田層と考えられる土層を確認したが、明

既にその遺構を確認することはできなかった。基本的な層序は、現耕作土、旧水田層および客土の下位の砂川から配されたと考えられる土砂堆積層である。土砂堆積層は、しまりのない砂質土、粗砂で湧水があり、軟弱な地盤をなしている。一部で、自然堤防上の微高地に遺構が形成されたようで、T2・12で弥生時代の遺構が確認され、遺跡の所在が判明した。遺構面の下位は土砂堆積層であった。



(2) 遺構と遺物

T 1 (図9)

事業計画区域の北西部に設けたトレンチで、現耕作土・旧水田層・客土等（1～3層）を除去すると、粗砂（5層）・砂質土（6層）となる。旧水田層や客土には弥生土器片を含むが、遺構は検出されなかった。

T 2 (図10、図版2-2～3-1)

事業計画区域の北西部に設けたもので、現耕作土・旧水田層等（1～5層）を除去すると、灰褐色粘性砂質土の弥生土器の包含層（6・7層）が認められた。包含層の下でややしまりのある黄褐色粘性砂質土（11層）の遺構面を検出した。この遺構面上に土坑2基を確認した。

土坑1は平面楕円形を呈し、規模は長軸70cm・短軸58cmを測る。検出面からの深さは26cmで、埋土には弥生土器の小片を含む。土坑2は長軸94cmを測る不整円形を呈し、検出面からの深さは30cmである。遺構面を形成する厚さ20cmの11層より下層は、しまりの弱い砂層（12層）となり、河川から配された土砂による自然堆積層と判断される。

遺物包含層を中心に弥生土器1～7が出土し、甕1・2は後期前葉に属すと考えられる。採集遺物



図9 T 1 (1/80)



図10 T 2 (1/80)・出土遺物 (1/4)

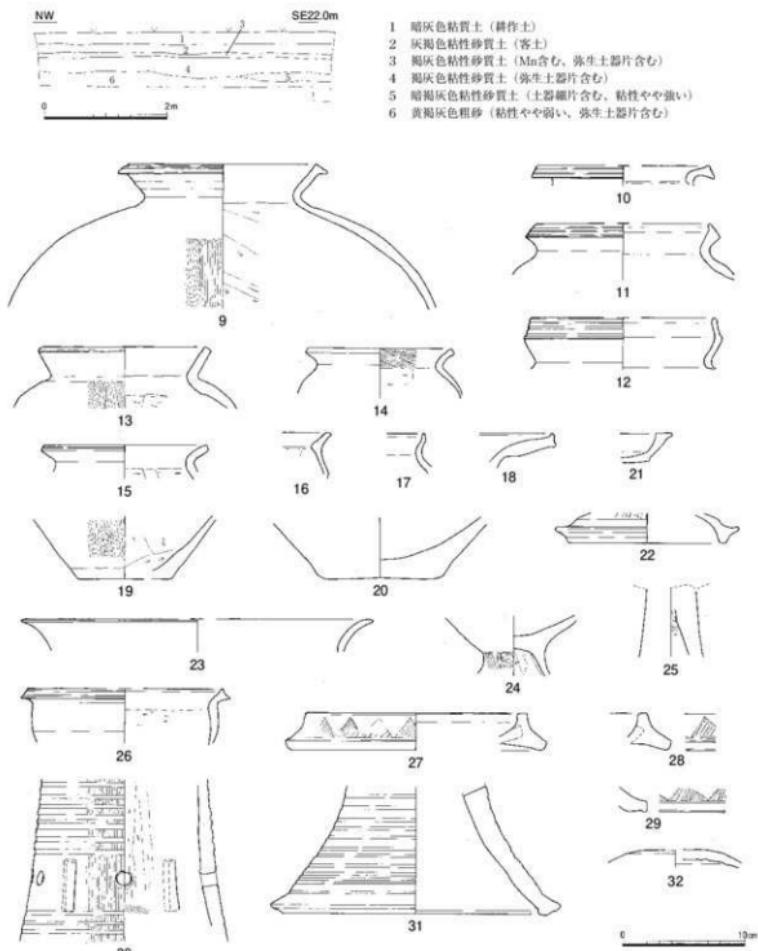


図11 T3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

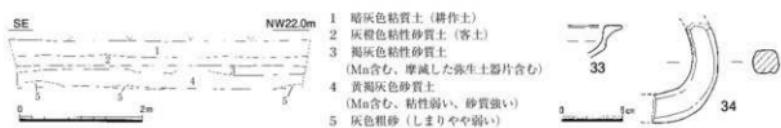


図12 T4 (1/80)・出土遺物 (1/4)

として青磁碗8がある。遺構出土の土器は小片のため時期を特定することは難しいが、包含層に含まれる土器から、遺構の時期は弥生時代後期前半と考えられる。

T 3 (図11、図版6-3)

事業計画区域の北西部に設けたもので、現耕作土と客土（1・2層）を除去すると、褐灰色や黄褐色の砂質土（3～6層）となり、河川からの自然堆積によって形成されている。それらの堆積層には、比較的大形の弥生土器片が含まれていたが、遺構は認められなかった。弥生土器9～31、須恵器の杯蓋32が出土した。弥生土器の時期は後期の範疇におさまるもので、後期前半が中心である。

T 4 (図12)

事業計画区域の北西部に設けたもので、現耕作土と客土（1・2層）を除去すると、弥生土器片を含む砂質土（3層）がみられ、しまりの弱い灰色粗砂（5層）となる。同様に河川からの土砂堆積層と考えられる。弥生土器33・34が出土し、高杯33は後期前葉に属す。遺構は認められなかった。

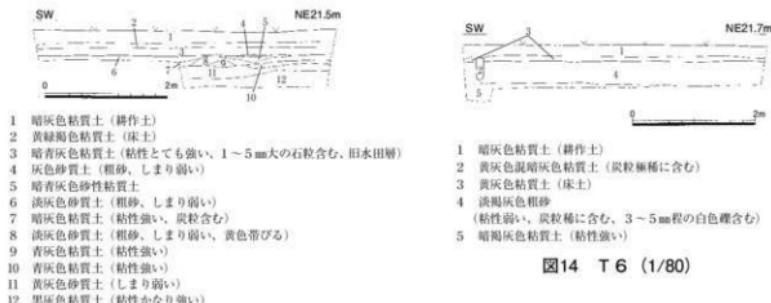


図13 T 5 (1/80)



図15 T 7 (1/80)

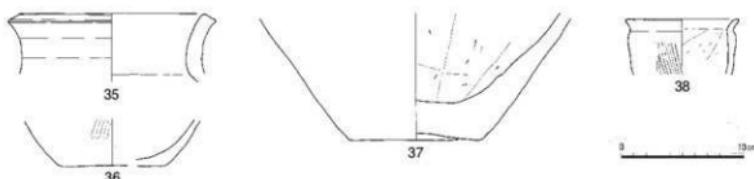


図16 T 8 (1/80)・出土遺物 (1/4)

T 5 (図13、図版3-2)

事業計画区域の北東部に設定したトレーニングで、現耕作土・床土・旧水田層（1～3層）の下位は砂質土と粘質土が互層状に堆積しており、12層は粘性のかなり強い黒灰色粘質土となる。これらは自然堆積層と判断され、遺構は検出されなかった。12層に木杭が打ち込まれていたが、設置された時期は不明である。



- 1 黒褐色粘質土（耕作土）
- 2 暗黒灰色粘質土（耕作土）
- 3 黄灰色粘質土（床土）
- 4 灰褐色粘性砂質土
- 5 青灰色粘質土（粘性あり）
- 6 灰黄色砂質土（粗砂、しまり弱い）
- 7 灰色砂質土（6層より細緻、しまり弱い）
- 8 暗褐色粘性砂質土（Mn沈着、しまり弱い）
- 9 灰色砂質土（7層と同一、しまり弱い）
- 10 黒褐色粘質土（しまりあり、粘性強い、Mn沈着）
- 11 淡灰色粘質土（しまりあり、粘性強い）
- 12 暗褐色粘質土（しまりあり、粘性強い）

図17 T 9 (1/80)



- 1 黒褐色粘質土（耕作土）
- 2 暗黒灰色粘質土（耕作土）
- 3 暗緑色暗灰粘質土（粘性かなり強い、床土）
- 4 灰褐色粘質土（粘性かなり強い、旧水田層）
- 5 暗灰色砂質土（粗砂、しまり弱い）
- 6 灰褐色砂質土（粗砂、しまり弱い）
- 7 黄褐色灰砂質土（粗砂、しまり弱い）
- 8 暗灰色砂質土（粗砂、しまり弱い）
- 9 灰色砂質土（5～8層より細緻、しまり弱い）

図18 T 10 (1/80)



図19 T 11 (1/80)

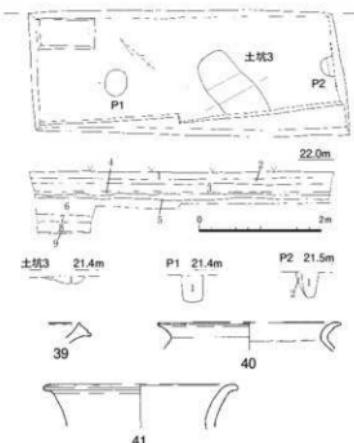


図20 T 12 (1/80)・出土遺物 (1/4)

T 6 (図14、図版3-3)

事業計画区域の北東部に設けたもので、現耕作土と床土（1・3層）を除去すると、4層の淡褐色粗砂が34~40cmの厚さで堆積し、その下の5層は暗褐色粘質土であった。4・5層は自然堆積層と判断され、遺構は検出されなかった。遺物は出土していない。

T 7 (図15)

事業計画区域のほぼ中央に設けたもので、現耕作土・旧水田層・床土（1~3層）を除去すると、5層は淡褐色粗砂となる。遺物・遺構の検出はなく、4・5層は自然堆積層と判断される。

T 8 (図16、図版4-1)

事業計画区域のほぼ中央に設けたもので、現耕作土等（1~3層）を除去すると、砂質土と粘質土が堆積している。河川から配されたものと考えられる自然堆積である。4層から弥生土器が出土しているが、遺構は認められなかった。4層上面付近で、壺の底部片37が出土した。

T 9 (図17)

事業計画区域の南部に設定したもので、現耕作土・床土等（1~3層）を除去すると、砂質土（6~9層）となる。10~12層は粘質土がみられ、自然堆積層と判断される。遺物の出土はなく、遺構も認められなかった。

T 10 (図18、図版4-2)

事業計画区域の南部に設定したもので、耕作土・床土等（1~4層）を除去すると、5層以下は砂質土の堆積となる。遺構は検出されず、自然堆積層と判断できる。

T 11 (図19、図版4-3)

事業計画区域の北西部、T 1とT 2のほぼ中間に設けたもので、耕作土・客土等（1~3層）を除去すると、4・5層は砂質土である。遺構は検出されず、河川から配された自然堆積層と判断した。

T 12 (図20、図版5~6-2)

事業計画区域の北西部、T 2とT 4のほぼ中間に設けたもので、耕作土・床土等（1~3層）を除去すると、灰色砂質土（4層）を介して、黒褐色の遺物包含層（5層）が認められた。包含層を掘り下げると、黄灰褐色粘質土（6層）の遺構面を検出した。遺構は、土坑1基と柱穴2基である。

土坑3は平面形が隅丸の長方形を呈し、長軸1.2m以上・短軸66cmを測る。P 1は直径35cm・検出面からの深さ44cmで、P 2は直径36cm・検出面からの深さ42cmである。

遺構面を形成している6層より下位の7~9層は灰色の砂質土で、自然堆積層と考えられる。遺物として、土坑3から弥生土器39~41が、5層から42が出土した。出土遺物から、遺構の時期は弥生時代後期である。

第3節　まとめ

今回の調査によって、条里遺構については現地表に残存する地割以上の情報を得ることはできなかった。条里遺構が面的な広がりによって理解される遺構であり、トレンチでの確認調査による情報収集の限界もある。しかしながら、弥生時代の遺構面との関わりから地表下の土層堆積状況について、いくつかの知見を述べておく。

弥生時代の遺構面は、事業計画区域北西部の一画に確認された。この遺構面の時期は、出土土器か

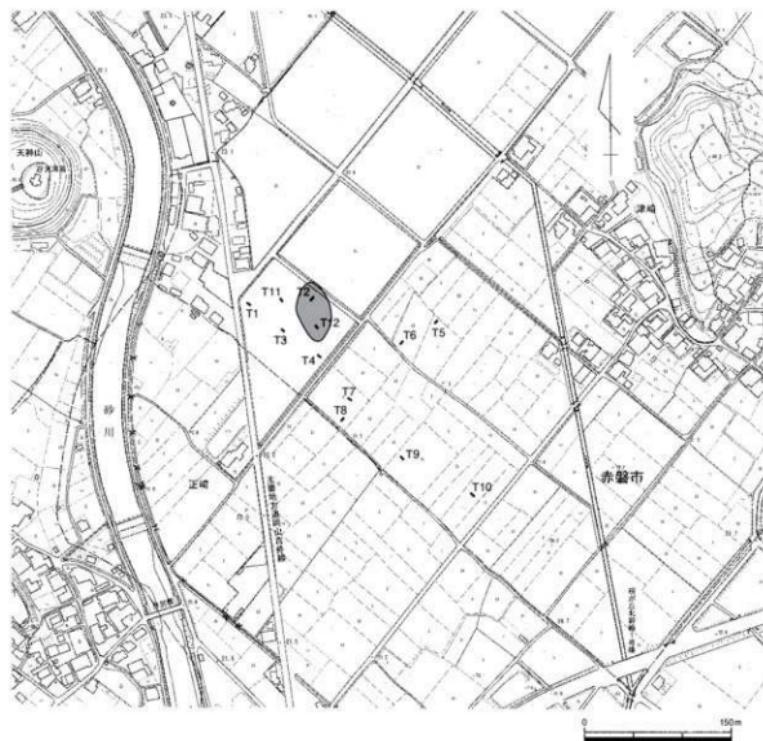


図21 遺跡推定範囲図 (1/5,000)

トーンで示した範囲

ら弥生時代後期前半と考えられる。遺構および遺構面はT2およびT12で検出され、その周囲のT3・4・8には堆積層に同時期の土器が認められた。遺構面の下位は河川から配された自然堆積層と考えられる砂質土である。したがって、丸田遺跡はT2・12を含む範囲の自然堤防上に形成されたものと想定される。遺跡の西200mには砂川が南流しており、河川の氾濫による土砂の流入や現在の河道に定まるまでの旧河道の存在が、この自然堆積層を形成したものと思われる。確認された遺跡については、遺構の密度が低く、小規模な集落であったとみられる。また、複数時にまたがるようなものではなく、一時期のものと思われる。丸田遺跡のように、砂川中流域の平野部では自然堤防上で弥生時代の集落が散在して展開した可能性があり、今後の調査が期待される。

なお、明治20年の赤坂郡津崎村の土地台帳（切り図）によれば、岡山県農林水産総合センター所有であった津崎114番地、五日市59-1番地を除くと、事業計画区域の水田区画は基本的に変わっておらず、現在の水田区画は明治20年までは廻ることができる。

第4章 中屋遺跡の大量出土銭

第1節 調査に至る経緯

平成22年7月18日、赤磐市石字中屋212において農作業のための道拡張の際に、備前焼三耳壺に納められた大量出土銭が発見された。7月20日に土地所有者から、赤磐市教育委員会へ発見の一報があり、担当職員が現地確認に赴いた。現地においてすでに遺物は取り出されていたが、出土状況の聞き取りと確認を行った。平成22年7月23日付で、発見者から所管警察署長あてに埋蔵文化財発見届が提出され、遺物は発見者と土地所有者の同意のもと、赤磐市教育委員会に保管されることとなった。大量出土銭の発見は市内初であり、また地方集落における室町時代末頃の貨幣流通の実態と経済活動を知る上で貴重な資料であることから、7月29日に現地でメディア向けの報道発表を行った。警察署での公告6ヶ月の後は、遺物の公共的な活用が望ましいため、譲与を受けた土地所有者から赤磐市教育委員会へ寄託され、大量出土銭の整理作業を実施した。

なお、出土地は名称未定（吉井町No150）の散布地に含まれていたため、遺跡名称を小字名から中屋遺跡と称している。

第2節 調査の概要

（1）概要

調査地は、標高約275mの南西に張り出した丘陵の平坦部に位置する。この丘陵一帯では弥生時代から中世にかけての遺物が表採されており、古墓や五輪塔が周囲に点在している。調査地南側にも近接して室町時代のものと考えられる五輪塔が安置されている。発見者の話によると、この付近は「ヤモンヤシキ」と呼ばれ、宝物が埋まっていると代々言い伝えられてきたという場所である。

畑脇にある農道拡張作業において農道の北側にある藪の法面を掘削したところ、大量の銅銭を納め

表3 文化財保護法に基づく提出書類一覧

遺物発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

�冈山県文書 番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第499号 H22.7.23	備前焼壺 1点 銅銭 計整理箱2箱	赤磐市石212 名称未定（吉井町150）	H22.7.18	個人	個人	赤磐市山陽郷土資料館

県帰属埋蔵文化財の譲与（法第107条、県条例第41条の3）

選定文書 番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	譲与申請者	発見者	譲与通知 文書番号 日付
赤教社 第856号 H23.3.8	備前焼壺 1点 銅銭 計整理箱2箱	赤磐市石212 名称未定（吉井町150）	H22.7.18	個人	個人	教文理 第1425号 H23.3.29

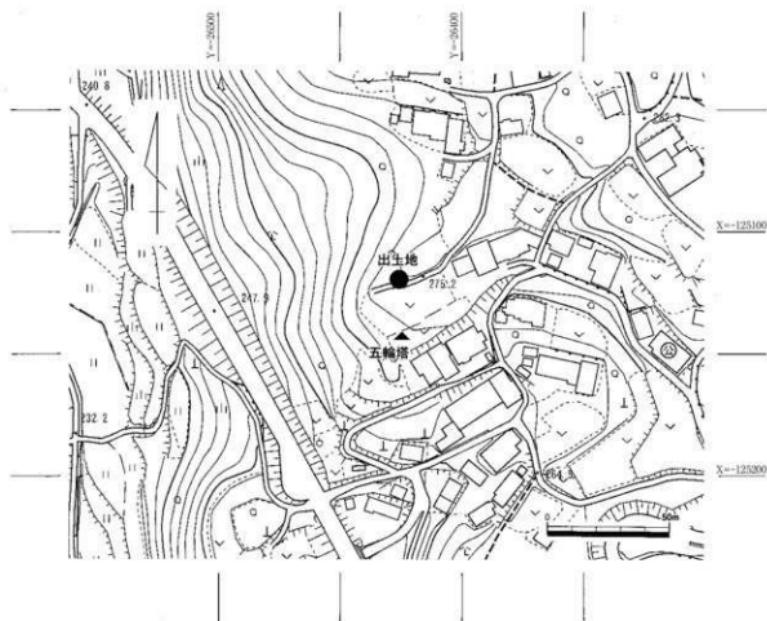


図22 出土地位置図 (1/2,000)

た備前焼壺が出土した。担当職員が確認を行った時点には、法面は黄色の地山が露出した状態であった。既に遺物は取り上げられており、現状で掘り方等の存在を認めることはできなかった。発見者によると掘削した時に地山よりもしまりの弱い土があったとのことであり、本来は地山を掘削して壺を埋納するための掘り方が設けられていたと推測する。また、掘削の時に蓋になりそうな石も一緒に転がっていたとの話であり、周辺を精査したが確認はできなかった。

出土遺物は備前焼壺1点とその内部に納められた大量の銅錢である。壺の内部には水が溜まっており、繊維等を確認することはできなかった。

壺や甕などの容器に大量の銭貨を納めて地中に埋める行為は中世において顕著に行われていた。その性格としては、以前より備蓄と埋納の二説が考えられている。前者は万が一に備えて地中に埋め、必要な時に掘り返して使用することを目的としたもの、後者は地鎮などの際に神仏に捧げることを目的とし、掘り返して再び使用することのない呪術的・祭祀的性格を帯びるものである。その性格によって「備蓄銭」や「埋納銭」などと呼び分けられることがあるが、本書では性格を限定することを避け「出土銭」あるいは「大量出土銭」という用語を使用している。なお、安定した分析結果を得るために1,000枚程度の数量が必要であるという鈴木公雄の基準（鈴木1992）に従い、県内の出土例においては出土銭貨の枚数が1,000枚以上のものを本例との比較対象として扱うこととする。

(2) 遺物

備前焼 (図23、図版10-1・2)

銅錢の納められた備前焼は、肩部に耳の付いた三耳壺で、口径10.9cm、器高30.4cm、底径16.4cm、最大径（胴部）24.6cmを測る。口縁部に一部欠損があるがほぼ完形である。口縁部から胴部にかけて外面には自然釉がかかっており、肩部に「灘」の窯印が刻まれている。16世紀前半のものと考えられる。

大量出土銭 (図24~26、図版10-3~13)

出土した銅錢は56種類5,833枚に及ぶ渡来銭で、総重量は20.145kgを量る。

大半の銅錢が癒着しており、縫銭のように一列に並んだ状態で癒着していたもののが多かった。銅錢の状態は良好であったため、大半は分離して銭種を判別することができた。中には銷や磨耗により銭種を特定できないものが見られたほか、「祥符□□」の□部分の文字が意図的に削り取られた状態の銅錢も1点認められた。

銭種と枚数は表4のとおりである。銭種不明のうち約7割は癒着した状態のもので、分離を行えば判読できる可能性がある。背文のあるものについては銭種ごとに枚数を合わせて表記した。中には背文が判別の困難なものもあり、後に「？」の付いているものは別の文字の可能性もある。背文はあるが判読できないものについては省いた。

最古銭は唐の開元通宝（初鋳年621年）、最新銭はベトナムの洪徳通宝（初鋳年1470年）である。銭種別にみると、最も枚数の多い銭種は開元通宝で729枚、次いで元豐通宝（北宋・初鋳年1078年）623枚、皇宋通宝（北宋・初鋳年1038年）522枚である。

鑄造国別では全体の約71%が北宋銭で、次いで唐銭約13%、南宋銭約2%と続く。明銭は約0.8%、少数ながら朝鮮銭とベトナム銭も確認された。北宋銭が全体の過半を占めるのは中世における大量出土銭的一般的な傾向であり、開元通宝以下枚数の多かった出土銭種は全国的に出土量の多い銭種である。

ベトナム後黎朝（前期）の銅錢である洪徳通宝が最新銭であることから、鈴木公雄による時期区分の第8期に分類される（鈴木1992）⁽¹⁾。第8期は16世紀第4四半期にあたり、大量に銭貨を埋める行為が衰退し、全国的に出土例が減少する時期である。

納められた銅錢には繊維等は残存していないかったが、銅錢の癒着状況から当初は縫銭の状態で壺に納められていた可能性が考えられる。中世では100文に満たない銭を100文と見なす省略法が採られていた。当時、主流であったと考えられている1縫=97文と仮定すると、6貫は5,820文となり今回納められていた枚数に近く、6貫を意識して納められたと推測する。

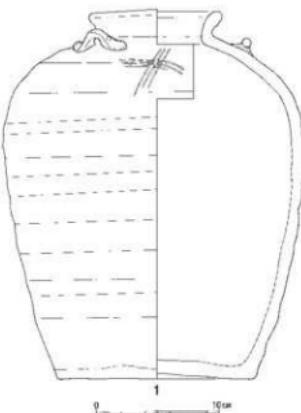


図23 備前焼 (1/4)

表4 大量出土銭種一覧

錢種	王朝	初鑄年	枚数	背文	番号
開元通宝	唐	621	729	上月：170、下月：16、左月：10、右上月：1、季星：3、星：2	M1
乾元重寶	唐	758	23	下月：5	M2
開元通宝	唐	845	16	昌：2、昌下月：1、京下月：2、洛：3、洛：1、益：1、真：1、越：1、克：1、潤：1、興：1、興：1	M3
乾德元宝	前蜀	919	1		M4
周通元寶	後周	955	3	下月：1	M5
唐國通寶	南唐	959	4		M6
開元通寶	南唐	960	1		M7
宋通元寶	北宋	960	30	下月：2、左月：2	M8
太平通寶	北宋	976	48		M9
淳化元寶	北宋	990	34		M10・12
至道元寶	北宋	995	81		M13・15
咸平元寶	北宋	998	88		M16
景德元寶	北宋	1004	120		M17
祥符元寶	北宋	1008	152		M18
祥符通寶	北宋	1008	94		M19
天禧通寶	北宋	1017	134		M20
天聖元寶	北宋	1023	306		M21・22
明道元寶	北宋	1032	21		M23・24
景祐元寶	北宋	1034	60		M25・26
皇宋通寶	北宋	1038	522		M27・28
至和元寶	北宋	1054	49		M29・30
至和通寶	北宋	1054	23		M31・32
嘉祐元寶	北宋	1056	35		M33・34
嘉祐通寶	北宋	1056	123		M35・36
治平元寶	北宋	1064	111		M37・38
治平通寶	北宋	1064	15		M39・40
熙寧元寶	北宋	1068	379		M41・42
元豐通寶	北宋	1078	623	星：1、上月：2	M43・44
元祐通寶	北宋	1086	398	星：1	M45・46
紹聖元寶	北宋	1094	193	上月：3、星：2	M47・48
元符通寶	北宋	1098	90		M49・50
聖宋元寶	北宋	1101	158		M51・52
大觀通寶	北宋	1107	54		M53
政和通寶	北宋	1111	207	上月：1	M54・55
宣和通寶	北宋	1119	15		M56・57
淳熙元寶	南宋	1174	41	柒：3、捌：2、九：2、十：2、十？：1、十一？：1、十二：2、十三：3、十四：1、十四？：1、十五：1、十五？：1、十六：1、上月：1、下月：1、月星：18	M58
紹熙元寶	南宋	1190	8	三：3、四：3、五：2	M59
慶元通寶	南宋	1195	22	元：5、二：5、二？：1、三：3、四：1、四？：1、五？：2、六：3	M60
嘉泰通寶	南宋	1201	9	元：3、二：3、三：2、四：1	M61
開禧通寶	南宋	1205	6	元：1、二：2、二？：1、三：1、三？：1	M62
嘉定通寶	南宋	1208	14	三？：1、五：1、六：1、七？：1、八：1、八？：1、九：3、十一：2、十一？：1、十三：1、十四：1	M63
大宋元寶	南宋	1225	1	二：1	M64
紹定通寶	南宋	1228	6	元：1、二：1、三：1、四：1、六：1	M65
嘉熙通寶	南宋	1237	2	三：2	M66
淳祐元寶	南宋	1241	5	元：1、二：1、八：1、九：2	M67
皇宋元寶	南宋	1253	7	元：1、二：1、三：3、五：1	M68
嘉定元寶	南宋	1260	5	元：2、三：1、五？：1	M69
咸淳元寶	南宋	1265	4	二：1、三：1、四？：1、八：1	M70
正隆元寶	金	1157	9		M71
大定通寶	金	1178	4	申：1	M72
洪武通寶	明	1368	28	浙：4、浙？：1、桂：1、一錢？：1	M73
永樂通寶	明	1408	16		M74
宣德通寶	明	1433	1		M75
朝鮮通寶	朝鮮	1423	1		M76
大和通寶	後黎	1443	1		M77
洪德通寶	後黎	1470	3		M78
不明			700		
計			5,833		

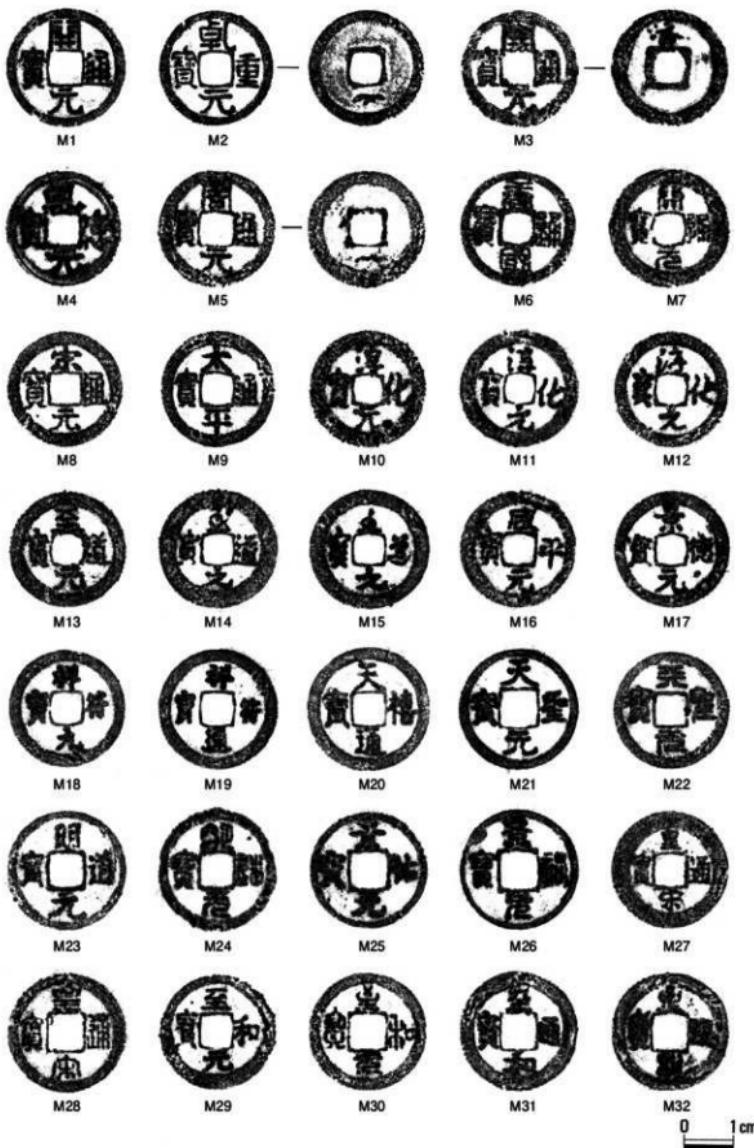


図24 大量出土銭① (1/1)

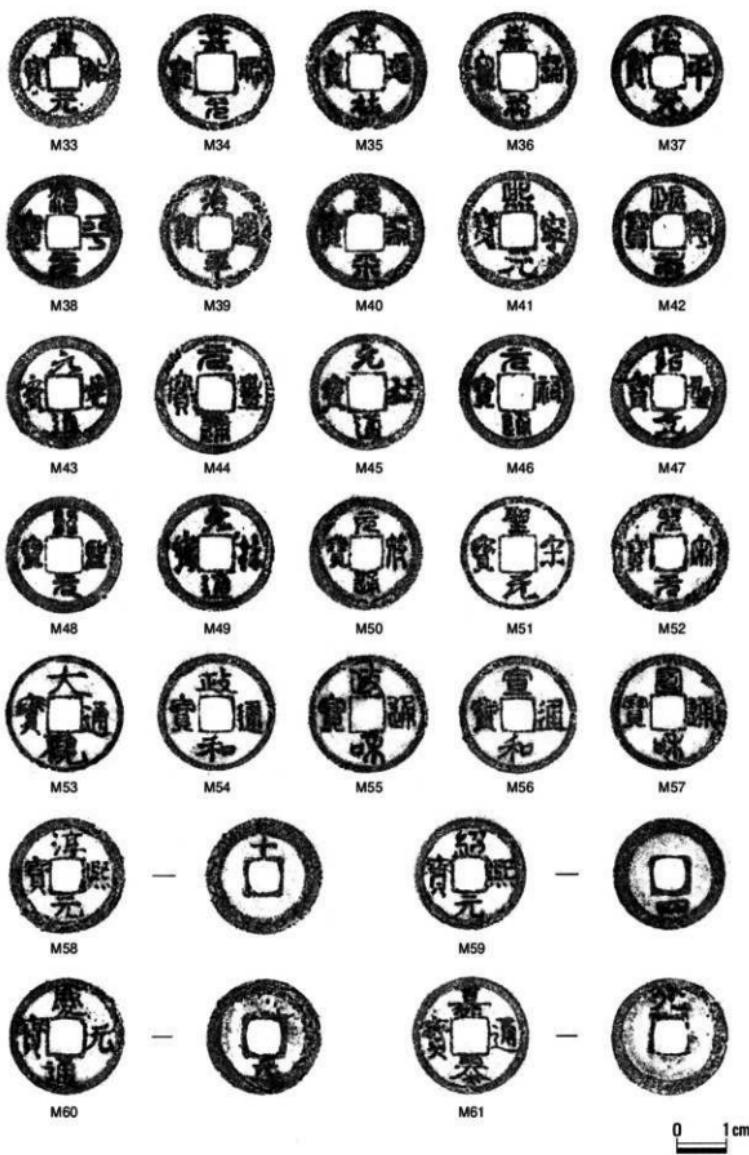


図25 大量出土銭② (1/1)

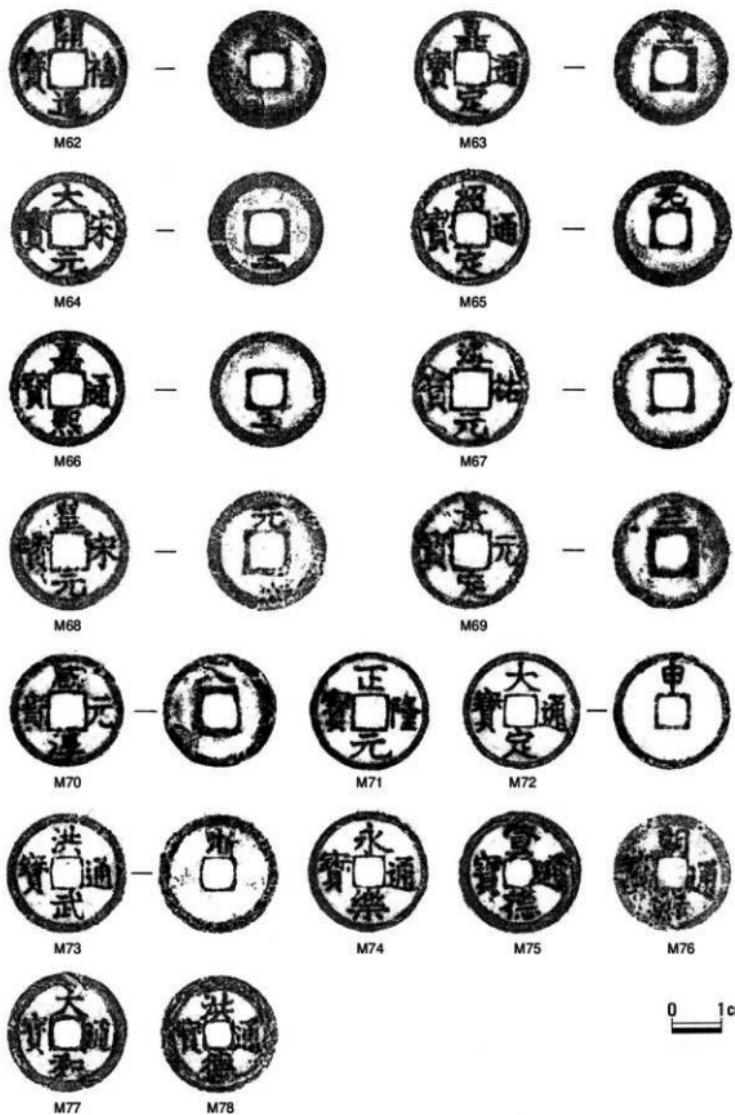


図26 大量出土銭③ (1/1)

第3節 まとめ

大量出土銭は56種5,833枚、20.145kgを量り、開元通宝から洪徳通宝までの銭貨が備前焼三耳壺に納められていた。

大量の銭貨が納められた時期は、三耳壺が16世紀前半のものと考えられること、大量出土銭が第8期と考えられること、慶長通宝や寛永通宝を含まないことから、16世紀後半頃に埋められたものと推察する。

誰がどのような状況で大量出土銭を埋めたのか。中屋遺跡は吉井川へ流れ込む高田川とその支流の北軒川に近接している。この北軒川に沿った谷筋には道が通っており、津高郡から小鎌、仁堀を経て東西を横断する道と合流し、吉井川の船着場であった周辺や美作方面へ行き来することができた。来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡からは北宋銭を中心とした渡来銭と寛永通宝が出土しており、この周辺で中世から近世にかけて銭貨の流通が盛んに行われていたと考えられる。さらに中屋遺跡周辺には山城が点在している。これらの山城は小規模なものが多く、武将が拠点とした城というよりも周囲の集落と密接な繋がりを持つものであったのであろう。このような場所において大量の銭貨を所有し得る人物を想定すると、銭貨の流通や高利貸しに携わる流通業者・金融業者や商工業者、山城と関連する有力農民という可能性が考えられる。

16世紀から17世紀初頭にかけては、赤松氏・浦上氏・尼子氏・宇喜多氏らが勢力の拡大を狙い、混亂を極める時期である。16世紀後半、宇喜多氏は浦上氏の本拠地であった和気町天神山城を攻め落とすと北上し、中屋遺跡周辺も勢力下とした。このような軍事的緊張の中にあって、大量の銭貨を地中に埋めた可能性は十分に考えられる。

岡山県の中で今回の大量出土銭がどのような位置付けになるのか、県内の出土例と比較をしてみる。中屋遺跡以前に1,000枚以上出土した（と思われる）大量出土銭は10例知られている（表5）⁽²⁾。これらは開墾の際などに発見された例が多く、銭種などの詳細な情報が不明なものが多い。壺や壺などの容器に入れて埋められることが多く、地中に直接もしくは布を巻くなどして埋めた例は少ない。

表5 岡山県における大量出土銭一覧

遺跡名・出土地名	銭種	枚数	最新銭	初鑄年	容器	時期区分	市町村	備考
中屋遺跡	56	5,833	洪徳通宝	1470	備前焼壺	第8期	赤磐市	
総社町大字継社字如常寺	54	7,402	咸淳元宝	1265	壺	第1期	総社市	
福本遺跡	58	11,709 (12,162)	咸淳元宝	1265		第1期	美作市	
早島村	53	5,172	至大通宝	1310		第2期	早島町	壺は3個以上あり
間山出土銭	64	8,347	至大通宝	1310	壺	第2期	美作市	間山廃寺との関係を示唆
権原下寺山	62	18,221	宣徳通宝	1433	麻布？	第6期	美作市	
新庄西谷	52	5,704	大和通宝	1443	備前焼壺	第7期	岡山市	戦時に供出したため、現在は銭壺のみ
下香山	-	5,250	-	-	勝間田焼瓶	-	美作市	
勝央町勝間田小坂田泰男宅保存	-	-	-	-	壺・木箱	-	美作市	多くは北宋・南宋銭。供出され現在7貫弱残る（前住所美作町三海田）
伊部出土銭	-	-	-	-	備前焼壺	-	備前市	
日畠出土銭	-	-	-	-	なし	-	倉敷市	1万枚に及ぶ

表6 岡山県における大量出土銭銭種一覧

銭種	説明	初銭年	統計年	早島村	岡山出土銭	福原下寺山	新庄西谷
半角	前漢			1	1		
五銖	前漢	B.C.118	6	3	7		
良寛	新	14			2		
開元通宝	唐	621	638	462	683	1,208	587
乾元重宝	唐	758	33	28	34	42	24
開元通宝	唐	845			44		
通正元宝	前蜀	916			1		
天漢元宝	前蜀	917	3		1		
光天元宝	前蜀	918	1	2	1		
乾德元宝	前蜀	919			2	4	
咸康元宝	前蜀	925			1		
周通元宝	後周	955	5	4	2	1	1
唐開通宝	南唐	959	7	5	6	13	2
大唐通宝	南唐	960			1		
開元通宝	南唐	960			13	7	
宋通元宝	北宋	960	36	10	31	52	16
太平通宝	北宋	976	59	44	89	131	47
淳化元宝	北宋	990	76		86	113	44
景德元宝	北宋	995	103	99	120	262	60
咸平元宝	北宋	999	123	86	116	258	67
景德元宝	北宋	1004	188	112	169	277	106
祥符元宝	北宋	1008	204	122	263	372	257
祥符通宝	北宋	1008	112	79	43	234	
天禧通宝	北宋	1017	154	101	179	167	172
天聖元宝	北宋	1023	379	271	416	678	103
明道元宝	北宋	1032	38	35	60	54	22
景祐元宝	北宋	1034	138	83	104	197	77
皇宋通宝	北宋	1038	1,027	648	1,075	1,771	669
至和元宝	北宋	1054	20	53	26	151	65
至和通宝	北宋	1054	20	13	89	44	
嘉祐元宝	北宋	1056	92	44	75	190	159
嘉祐通宝	北宋	1056	174	121	188	277	
治平元宝	北宋	1064	150	104	166	324	67
治平通宝	北宋	1064	22	13	7	31	
熙寧元宝	北宋	1068	682	515	838	1,568	508
元豐通宝	北宋	1078	891	637	1,133	1,833	658
元祐通宝	北宋	1086	724	448	780	1,458	527
紹聖通宝	北宋	1094	299	230	365	562	212
紹聖通宝	北宋	1094	1	1			
元符通宝	北宋	1098	127	67	167	173	44
聖宋元宝	北宋	1101	210	206	271	689	226
大觀通宝	北宋	1107	83	68	91	147	161
政和通宝	北宋	1111	307	228	341	576	336
宣和通宝	北宋	1119	34	15	26	53	48
建炎通宝	南宋	1127	1		2	1	1
紹興元宝	南宋	1131	3	3	3	2	2
淳熙元宝	南宋	1174	40	25	52	60	65
紹熙元宝	南宋	1190	16	8	9	10	25
慶元通宝	南宋	1195	20	14	20	29	27
嘉泰通宝	南宋	1201	13	6	13	9	23
開禧通宝	南宋	1205	10	2	8	4	15
嘉定通宝	南宋	1208	48	25	39	43	58
大宋元宝	南宋	1225	1			4	
紹定通宝	南宋	1228	14	14	13	14	25
端平元宝	南宋	1234	2	2	1	4	5
嘉熙通宝	南宋	1237	7	2	5	2	1
淳祐元宝	南宋	1241	10	59	7	14	16
皇宋元宝	南宋	1253	5	4	2	2	
開慶通宝	南宋	1259				1	
景定元宝	南宋	1260	9	7	11	13	1
咸淳元宝	南宋	1265	9	12	11	16	14
正隆元宝	金	1157	12	9	10	25	26
大定通宝	金	1178		1		10	4
至大通宝	元	1310		3	1	4	3
至正通宝	元	1350				1	
大中通宝	明	1361				7	
洪武通宝	明	1368				670	47
永樂通宝	明	1408				2,203	38
宣德通宝	明	1433				909	35
東陽通宝	高麗	1097					1
海東通宝	高麗	1097		1			
朝鮮通宝	朝鮮	1423				65	5
天福通宝	前蜀	984		1			
大和通宝	後黎	1443					1
當貫神寶	平安	818				1	
無文錢					2		
その他					5	1	1
不明		15	17	20	180		
計		7,402	5,172	8,347	18,221	5,704	
備考(その他)					折二紹興2、折二 元豐1、折二建炎2	威元通宝1	威元通宝1

大量出土銭の出土地は街道周辺や吉井川水系沿いに位置している場合が多い。吉井川は中世には既に高瀬舟による運搬が行われており、流通が活発に行われていた。特に中世の主要な街道であった出雲街道と直交する地域周辺に集中する様相を示しており、交通と経済の要衝であった場所において大量の銭貨を埋める行為が活発であったようである。

大量出土銭の主体者としては、中屋遺跡のような流通・金融に関係する人物、商工業に係わる人物、有力農民などが想定されるほか、間山出土銭（美作市）については、原三正が間山廃寺と近接した位置で出土していることから間山廃寺との関係を指摘している（原1970）。主体者を明らかにするために周囲の環境や状況に注意する必要があるだろう。

県内の出土例でより古い様相を示すのが、総社町出土例（現総社市）、福本遺跡出土例（美作市）、早島村出土例（現早島町）、間山出土銭だ。これらの大量出土銭は中屋遺跡よりも古い銭種を含む構成になっており、明銭を含まない。総社町および福本遺跡の出土例は最新銭が咸淳元宝（南宋・初鑄年1265年）のため第1期、早島村出土例、間山出土銭は咸淳元宝より新しい至大通宝（元・初鑄年1310年）が最新銭のため第2期に分類される⁽³⁾。

橋原下寺山（美作市）と新庄西谷（岡山市）の出土例は明銭を含む。橋原下寺山出土例はベトナム銭を含まず、最新銭が宣徳通宝（明・初鑄年1433年）であることから第6期に分類される。永楽通宝が2,203枚と最も多く出土しているほか、同じく明銭の洪武通宝（初鑄年1368年）670枚、宣徳通宝909枚と多く、全体に対して明銭占める割合は約20.8%と高い。

新庄西谷出土例は戦時中に供出されたため現存していないが、銭種と枚数は記録されている。それによると、最古銭は開元通宝、最新銭はベトナム銭の大和通宝（初鑄年1443年）である。最多銭は皇宋通宝（北宋・初鑄年1038年）で、北宋銭が4,651枚と約81.5%を占める。明銭は2.1%、永楽通宝も38枚（全体の約0.7%）と少ない。第7期に分類される大量出土銭である。

明銭が大量に使用されるようになると、関東では永楽通宝が好んで使用されるのに対して関西では宋銭が主体であったほか、各地で地域性が認められるようになる。図27は铸造国別に銭種の出現率を比較した図、図28は県内で出土する割合の高い銭種10種と明銭を時期ごとに出土した割合で比較した図である。図27・28より、第6期に急増する明銭が第7期以降では減少し、開元通宝が増加しているということが分かる。特に、永楽通宝は第6期の橋原下寺山出土銭では全体の約12.1%であったのに

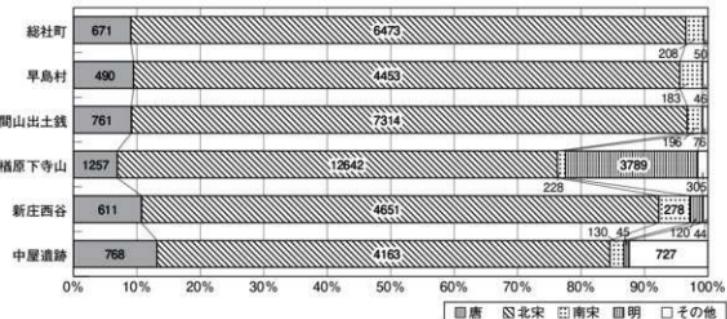


図27 岡山県における出土渡来銭の铸造国別出現率

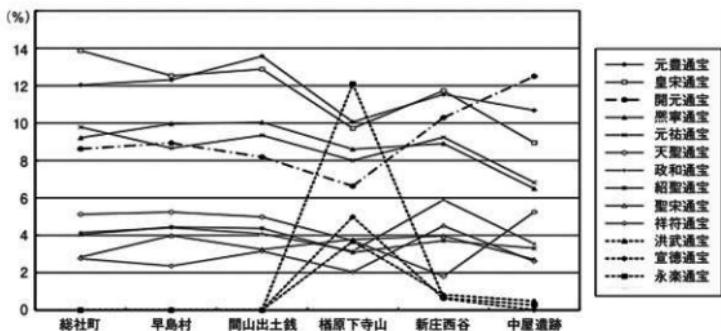


図28 岡山県における出土渡来銭の出現率

対し、第7期の新庄西谷出土例・第8期の中屋遺跡においては1%にも満たない。

一方、県内の中世山城・館での銭貨の出土例では、北宋銭と永楽通宝で構成される例が多いことが指摘されている（平井2006）。このような意図的に埋められたものではない出土例は大量出土銭よりも当時の銭貨の実情を反映しており、市場において永楽通宝を忌避するような状況ではなかったとも推測できるが、出土数も少なく断定はできない。大量出土銭における銭種の増減が地域性を反映したものであるのか、地域性が顕著になる時期の銭貨の実態はどのようなものであったのかは、今後の類例を待って判断すべきであろう。

今回の事例は県下の事例において最も新しい時期のものであり、流通銭貨の地域性と中世から近世への移行を考える上でも貴重な発見である。今回の情報だけでは大量出土銭の性格を特定することは難しく、多くの課題が残るが、今後の類例の増加の中で検討していきたい。

註

- (1) 本文では鈴木公雄の8期区分に準じている。鈴木の区分を細分した永井久美男の10期区分（永井2002）では、中屋遺跡と新庄西谷出土例は第9期（16世紀第3四半期～17世紀第1四半期）に該当する。
最新銭を用いた鈴木の時期区分によると、景定元宝・咸淳元宝等を時期決定銭とする第1期は13世紀第4四半期～14世紀第1四半期、至大通宝を時期決定銭とする第2期は14世紀第2四半期～第3四半期、大中通宝・洪武通宝等を時期決定銭とする第3期は14世紀第4四半期～15世紀第1四半期、永楽通宝等を時期決定銭とする第4期は15世紀第2四半期～第3四半期、朝鮮通宝を時期決定銭とする第5期は15世紀第4四半期、宣徳通宝を時期決定銭とする第6期は16世紀第1四半期～第2四半期、世高通宝等を時期決定銭とする第7期は16世紀第3四半期、弘治通宝・洪順通宝等を時期決定銭とする第8期は16世紀第4四半期にあたる。
- (2) 報告書の合計枚数と各銭種の合計が異なる場合、各銭種の合計枚数を表に記載している。福本遺跡の合計枚数は県埋文報告9の枚数と括弧書きで鈴木公雄1999の枚数とを併記している。
- (3)『日本考古学辞典』には早島村出土例で寛永通宝（初鑄年1636年）1枚出土となっているが、この1枚を除くと最新銭は初鑄年1310年の至大通宝になり、約300年に渡る間の銭貨は一枚もない。また、多少の差異は

あるが2期の岡山出土銭の銭種構成と近似する。これらの点を考慮し寛永通宝を除外して検討した。合わせて表6では不明1点として表記している。

引用・参考文献

- 尾上元規ほか2006「来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』199 岡山県教育委員会
- 鈴木公雄1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』第六一巻三・四号 三田史学会
- 鈴木公雄1999「出土銭貨の研究」東京大学出版会
- 水井久美男1994「中世の出土銭一出土銭の調査と分類一」兵庫埋蔵銭調査会
- 水井久美男2002「新版中世出土銭の分類(図版)」高志書院
- 原三正1970「岡山県美作町岡山出土銭調査報告」『岡山史学』第23号 岡山史学会
- 平井泰男2006「岡山県における中世山城・館出土の銭貨について」『出土銭貨』第25号 出土銭貨研究会
- 藤井駿・市川俊介1967「岡山県美作町より出土の銭貨について」『岡山史学』第19号 岡山史学会
- 松本和男1980「英田中学校改修工事に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会
- 日本考古学協会編1962「日本考古学辞典」東京堂出版
- 岡山県教育委員会1979「岡山県埋蔵文化財報告」9
- 岡山県吉備都教育会1938「吉備都史」下巻 名著出版
- 倉敷市史研究会1996「新修倉敷市史」第一巻通史福考古 倉敷市
- 御津町史編纂委員会1985「御津町史」御津町
- 美作町史編纂委員会2004「美作町史」地区誌編 美作町
- 吉井町史編纂委員会1995「吉井町史」通史編 吉井町

遺物観察表

向山宮岡遺跡 土器

面積図番号	査定番号	遺物名	土器名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	形態・手法の特徴など
						1口径	底径	器高			
6	1	雙穴住居	中央穴	陶土	盆	23.2	(42)	にぶい黄緑	脚部L1/10以下		
	2	雙穴住居	中央穴	陶土	高杯	10.6	(28)	明赤褐	脚部L1/6		
	3	雙穴住居	柱穴	陶土	高杯	10.2	(24)	橙	脚部L1/2SL下		
7	4	土坑	下層北東	陶土	高杯	10.0	6.4	浅黄・明赤褐	L1脚部L1/10SL下、脚部L1/6		
	5	土坑	下層南東	陶土	高杯	11.4	10.4	6.8	にぶい黄緑	L1脚部L1/6、脚部L3/4	器造り
	6	土坑	下層	陶土	jar	42	(29)	にぶい黄緑・黒褐	底部L2		

向山宮岡遺跡 石器

面積図番号	査定番号	遺物名	土器名	器種	計測値(cm)	石材			備考
						長さ	幅	厚さ	
7	S1	土坑	中層	砾石	134	8.4	6.5		

丸田遺跡 土器

面積図番号	査定番号	出土地区	遺物名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	形態・手法の特徴など
						1口径	底径	器高			
10	1	T2	陶生土器	素	盆	14.4		(3.1)	灰黄褐	L1脚部L1/5	
	2	T2	陶生土器	素	盆	14.4		(2.6)	灰青	L1脚部L1/6	
	3	T2	陶生土器	素	盆	36.0		(1.6)	赤べにぶい灰	L1脚部L1/10	
	4	T2	陶生土器	素	盆	5.2		(6.7)	赤・明赤褐	底部L4	
	5	T2	陶生土器	素	盆	27.6		(3.7)	赤・深黄褐	L1脚部L1/8	
	6	T2	陶生土器	素?	盆	(3.9)			灰白・灰灰	脚部片	刺突文
	7	T2	陶生土器	素	盆	9.0		(1.7)	にぶい黄緑	L1脚部L1/10	
	8	T2	陶生	碗		(3.1)			灰白	L1脚部片	
11	9	T3	陶生土器	素	盆	15.4		(11.9)	淡黄褐・灰黄	L1脚・脚上部L2脚	
	10	T3	陶生土器	素	盆	14.0		(1.7)	にぶい灰	L1脚部L1/8	
	11	T3	陶生土器	素	盆	14.0		(4.6)	にぶい灰	L1脚・肩部L1/8以下	
	12	T3	陶生土器	素	盆	15.0		(4.2)	淡黄褐	L1脚部L1/10	
	13	T3	陶生土器	素	盆	13.2		(5.0)	暗赤褐・にぶい赤褐	L1脚・肩部	
	14	T3	陶生土器	素	盆	11.6		(4.1)	にぶい灰	L1脚・脚部L1/4	
	15	T3	陶生土器	素	盆	33.4		(2.6)	にぶい黄緑	L1脚部	
	16	T3	陶生土器	素	盆	(3.7)			にぶい黄緑	L1脚部片	
	17	T3	陶生土器	素	盆	(3.3)			灰黄褐	L1脚部片	
	18	T3	陶生土器	素	盆	28.0		(3.7)	淡黄褐	L1脚部片	
	19	T3	陶生土器	jar		7.6		(5.2)	黑褐・暗	底部L3	
	20	T3	陶生土器	jar		8.8		(5.1)	にぶい黄緑	底部L2	
	21	T3	陶生土器	高杯		(2.4)			赤	L1脚部片	
	22	T3	陶生土器	高杯		11.8		(2.4)	灰黄褐	脚部片	刺突文
12	23	T3	陶生土器	高杯		28.8		(2.7)	にぶい黄緑	L1脚部L1/8	
	24	T3	陶生土器	高杯		(5.0)			淡黄褐・暗	体・脚部片	
	25	T3	陶生土器	高杯		(5.6)			暗灰・にぶい暗	脚部片L2	
	26	T3	陶生土器	高杯		(4.5)			暗	L1脚・脚部L1/8	
	27	T3	陶生土器	器台		(3.0)			暗	L1脚部L1/5	副曲文
	28	T3	陶生土器	器台		(3.1)			暗・深暗	L1脚部片	副曲文
	29	T3	陶生土器	器台		(1.4)			暗	L1脚部片	副曲文
	30	T3	陶生土器	器台		(13.3)			淡黄褐	脚部片	円形孔・長方形孔
	31	T3	陶生土器	器台		20.0		(10.5)	明赤褐	脚部片L1/12	
	32	T3	陶生	瓶		(1.5)			灰	体部片	
16	33	T4	陶生土器	高杯		(3.6)			にぶい黄緑	杯底片	
	34	T4	陶生土器	高杯					手	把手片	
	35	T8	陶生土器	素	盆	15.0		(5.6)	にぶい灰・褐色	L1脚・脚部片	
	36	T8	陶生土器	素	盆	8.6		(3.0)	にぶい灰・淡黄褐	底部L4	
20	37	T8	陶生土器	素	盆	11.0		(10.5)	淡黄褐・暗	底部L4	
	38	T8	陶生土器	素	盆	8.8		(4.6)	暗	L1脚・脚部L1/6	
	39	T12	土坑3	陶生土器	素			(1.6)	暗	L1脚部片	
	40	T12	土坑3	陶生土器	素	13.8		(2.3)	暗灰	L1脚部片L10	
	41	T12	土坑3	陶生土器	素	14.2		(3.7)	にぶい黄緑	L1脚・脚部片	L1脚部内面に2本の沈痕
	42	T12	土坑3	陶生土器	高杯	25.4		(3.3)	灰褐・にぶい暗	杯底片	

中屋遺跡 土器

面積図番号	査定番号	遺物名	土器名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	形態・手法の特徴など
						1口径	底径	器高			
23	1	—	—	偏頭壺	三耳壺	10.9	16.4	30.4	暗褐灰	ほぼ完形	口縁部から脛部にかけて自然転がかかる、脣部に「巻」の型印あり

*「計測値」のうち、「()」は残存値を示す。

図 版



向山宮岡遺跡 調査区全景（東から） 中央：竪穴住居

図版1 向山宮岡遺跡



1 土坑（北から）



2 土坑 土層断面
(北東から)



3 出土遺物



1 調査前（南から）



2 T 2 (東から)



3 T 2 土坑1
(北東から)

図版3 丸田遺跡



1 T2 土坑2
(南東から)



2 T5 (東から)



3 T6 (東から)



1 T8 (東から)



2 T10 (北から)



3 T11 (南西から)

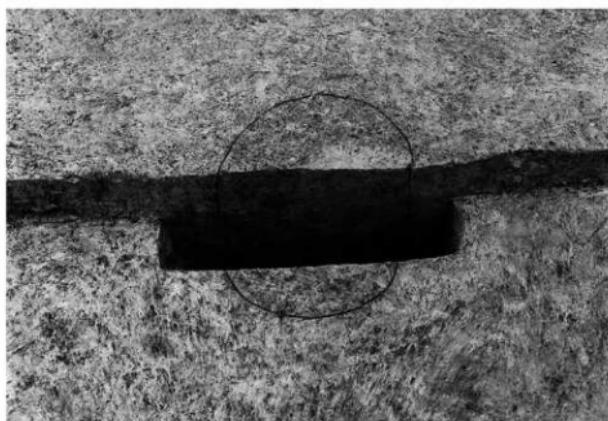
図版5 丸田遺跡



1 T12 (北西から)



2 T12 土坑3
(北から)



3 T12 P1
(北東から)



1 T12 P2
(北西から)

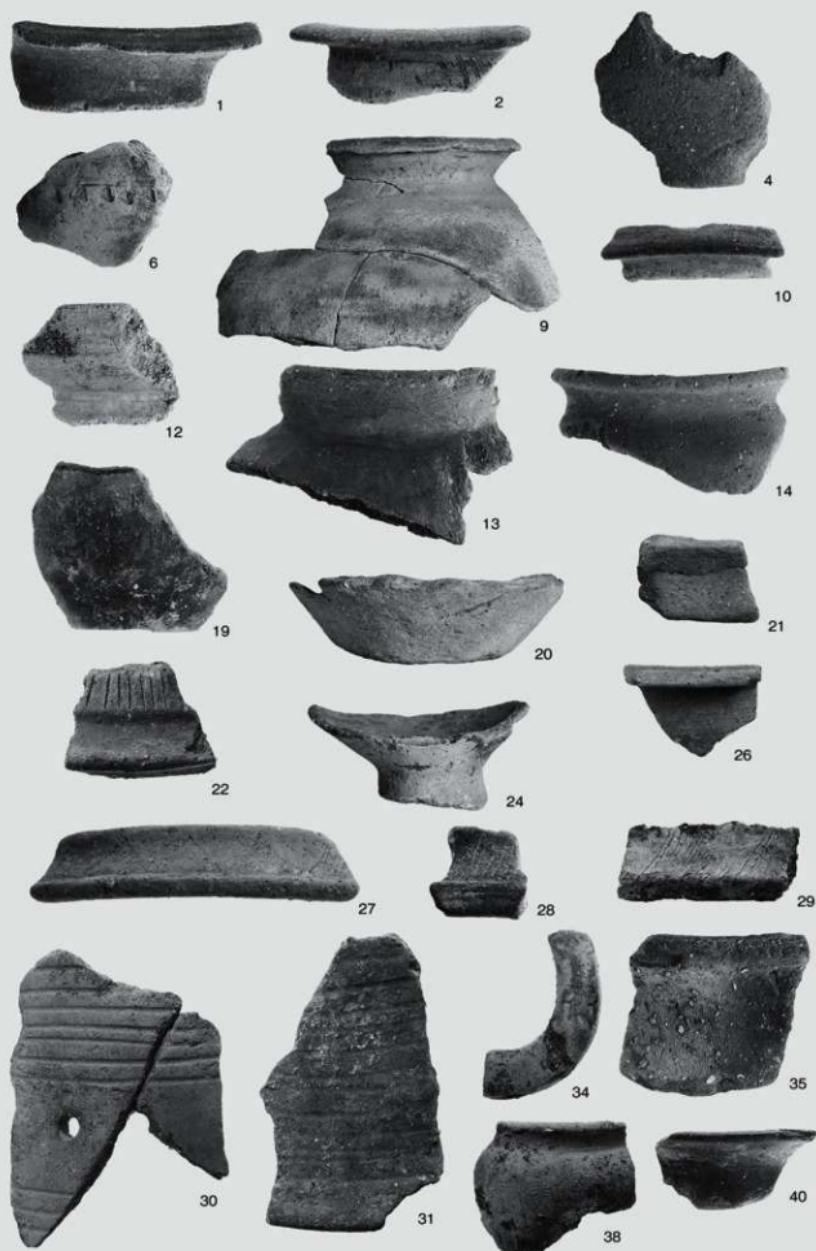


2 T12 土層断面
(西から)



3 調査風景 T3
(東から)

図版7 丸田遺跡



出土遺物



1 出土地周辺（東から）



2 出土地（東から）



3 出土地（南から）

図版9 中屋遺跡



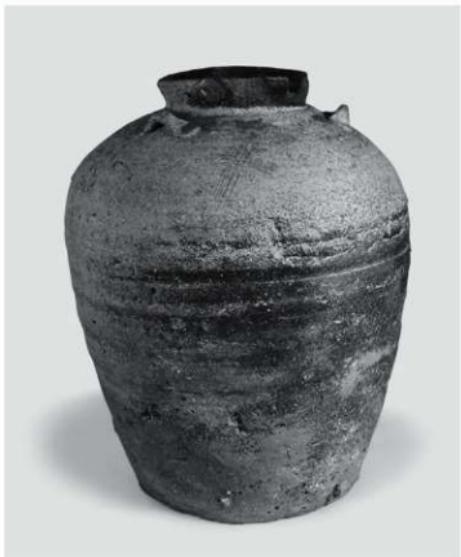
1 出土地南の畑にある
五輪塔（南から）



2 報道発表の状況



3 大量出土銭
三耳壺内の状況



1 備前焼三耳壺

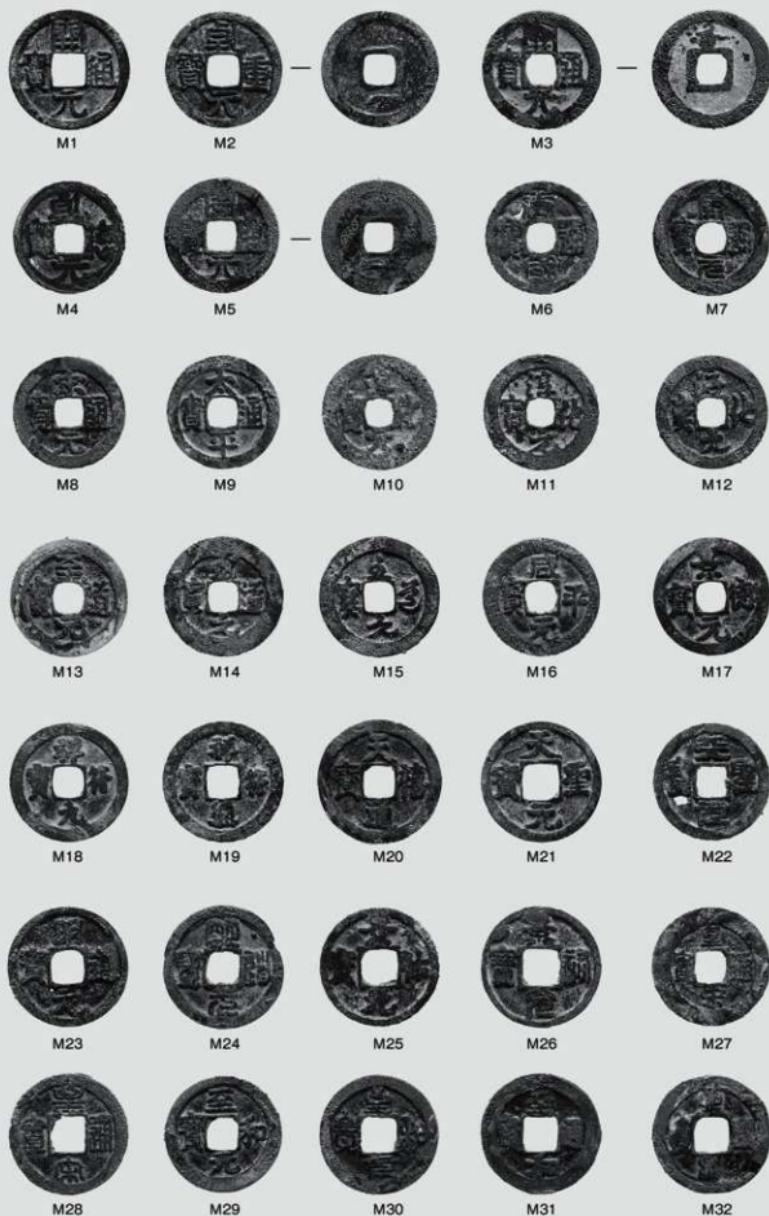


2 備前焼三耳壺窯印

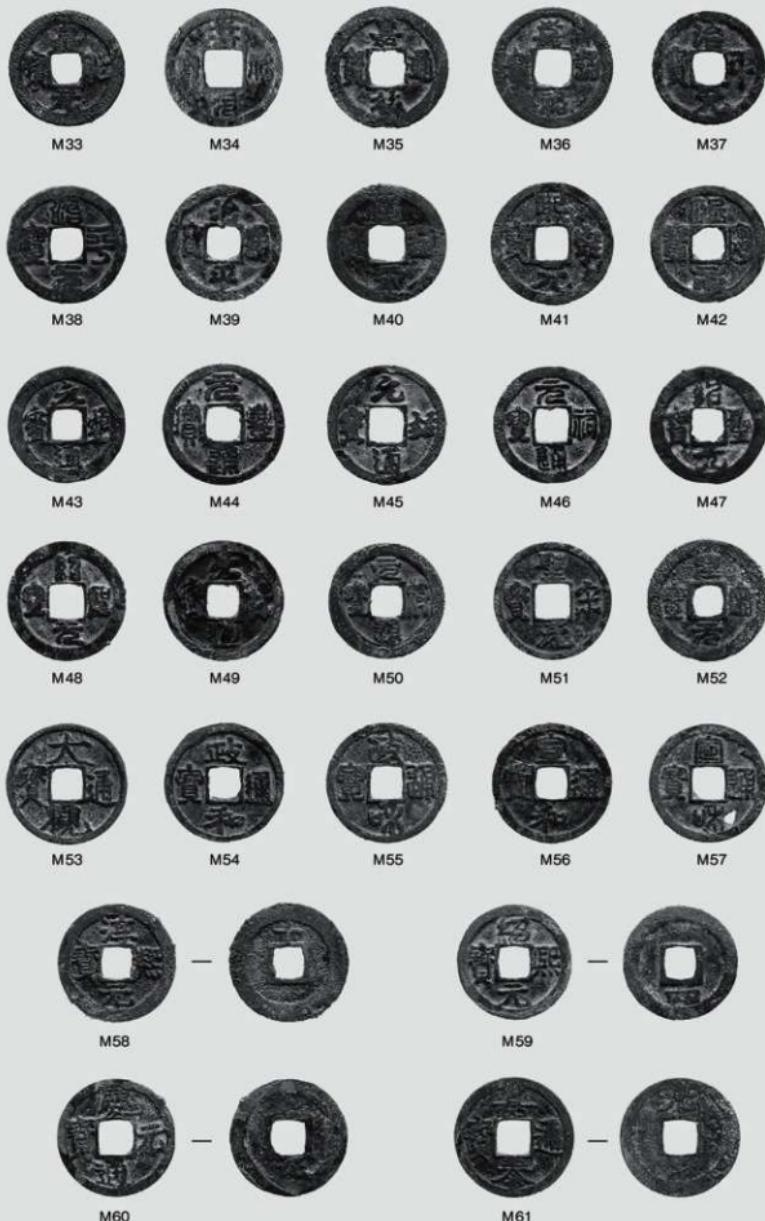


3 銅錢

図版11 中屋遺跡



大量出土錢



大量出土銭

図版13 中屋遺跡



M62



M63



M64



M65



M66



M67



M68



M69



M70



M71



M72



M73



M74



M75



M76



M77



M78

大量出土錢

報告書抄録

赤磐市文化財調査報告 第6集

向山宮岡遺跡
丸田遺跡
中屋遺跡の大量出土銭

平成25年2月27日 印刷
平成25年2月28日 発行

編集・発行 岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印 刷 西尾総合印刷株式会社
岡山県岡山市北区津高651
